

坪田讓治

「風の中の子供」に会いに行こう

—島田と天満を大冒険!—



ノートルダム清心女子大学 日本語日本文学科

「ツボジョーワールド探検隊」による 坪田讓治紹介冊子

このたびは、坪田譲治紹介冊子「坪田譲治『風の中の子供』に会いに行こう―島田と天満を大冒険!―」を手にとっていただき、ありがとうございます。坪田譲治(明治二十三年〜昭和五十七年)は全国的な活躍をした、岡山市出身の小説家、児童文学作家です。

ノートルダム清心女子大学日本語日本文学科の学生による「ツボジョーワールド探検隊」は二〇一七年度に結成され、二〇一八年度の第二期メンバーである私たちは、さらに、皆様に坪田譲治と岡山について深く知っていただきたいと思い、今回は、岡山市の島田と天満を舞台とする小説「風の中の子供」をメインとした冊子を作成しました。

「風の中の子供」には譲治が生きていた時代の岡山の豊かな自然や、子どもたちの「生きる力」が描かれています。岡山に生きる私たちは、譲治からのメッセージを受け取り、譲治の時代から変わったもの、変わらないものを考えたり、伝えたりしていく必要があると思います。そうすることによって、私たちは、岡山で生きる意義と喜びを受けとめながら、人生をより豊かなものにしていくことができるのではないのでしょうか。

この冊子が、岡山を愛した譲治のメッセージを皆様の人生に取り入れていただけるきっかけになればと思います。

坪田譲治が描いた作品たち

第1期 譲治 26~36歳 (大正5~15年)

譲治はこの頃から小説を発表し始めました。

正太が登場する「正太もの」が多く、小説集『正太の馬』は36歳で初出版されました。



第2期 譲治 37~44歳 (昭和2~9年)



童話を小説とともに書き始めた時期です。

児童雑誌『赤い鳥』に、「河童の話」、「善太と汽車」、「ろぼと三平」などを発表しました。

善太と三平はこの頃から登場するんだ!



第3期 譲治 45~55歳 (昭和10~20年)



新聞連載小説「風の中の子供」

譲治が46歳の時、新聞小説「風の中の子供」が発表されました。

「お化けの世界」「風の中の子供」「子供の四季」が発表され、譲治の代表作となりました。特に、「風の中の子供」は、新聞連載後、単行本となり、さらに映画化されて、世の中に広まっていきました。



「風の中の子供」は、昭和11年9月5日から11月6日まで『東京朝日新聞』夕刊に連載された新聞小説でした。(全38回連載)

昭和11年12月
新聞小説連載直後に出版された
単行本『風の中の子供』(竹村書房)

『東京朝日新聞』夕刊 昭和11年10月31日(土)付の紙面

第4期 譲治 56~92歳 (昭和21~57年)

第4期での作品『かっぱとドンコツ』『ねずみのいびき』では岡山での幼少体験がリアルに描かれています。

目次

・坪田譲治が描いた作品たち

・「風の中の子供」に登場する人物紹介

・スライドと朗読台本「風の中の子供」

・スライドで読む「風の中の子供」(抄)

・地図でたどろう「風の中の子供」の舞台

・知ってる? 「風の中の子供」に描かれた善太と三平の遊び

・世界も注目! 「CHILDREN IN THE WIND」

・「坪田譲治コレクション」を……の・ぞ・き・み

・テーマソング「譲治のおかやま」

・診断! あなたにぴったりの一冊を

2018年2月 スライドフィルムと朗読台本が発掘されました！

スライドと朗読台本「風の中の子供」

次のページから、
スライドフィルムによる
「風の中の子供」が始まるよ！



「文学と岡山」製作委員会のフィルム
補整による修復後、初公開です！



日本光藝株式会社のスライド
に対応した朗読台本
(山根知子研究室蔵)

いままでにも、子供の心理をあつ
かったものはある。だが、たんに子
供としてではなく社会的な存在と
しての子供をえがいたものは、ほかに
例をみない。そこにこの作品の画
期的な意義がある。
本篇のスライド化にあたっては、
原作者、坪田譲治氏の指導のもと、
原作のもつ香り高い芸術性をでき
るだけ忠実にいかすよう試みた。

「解説」より



スライドフィルム「風の中の子供」
日本光藝株式会社 昭和32年
イラスト 中山正美
(山根知子研究室蔵)

「風の中の子供」に登場する人物紹介

善太

物語の主人公で、三平の兄。
小学5年生。



三平

物語の主人公。小学1年生。



母

善太と三平の母。



父

善太と三平の父、青山一郎。工場の重役。
実在のモデル：坪田譲治



鵜飼のおじさん

善太と三平の母の兄。山奥で医
者をしている。

実在のモデル：伊丹東慶（譲治
の姉の夫。天満在住。）



鵜飼のおばさん

鵜飼のおじさんの妻。

実在のモデル：政野（譲治の姉）



伊丹東慶（左） 政野（右）
一天満の診療室にてー



幸介

鵜飼のおじさん、おばさんの息子。
小学3年生。



美代子

鵜飼のおじさん、おばさんの娘。
小学6年生。



金太郎

三平の一つ年上の小学2年生。
工場に勤務する佐山の息子。



「あっ、お巡りさんだ！」



「がんばれ三平。がんばれ、がんばれ」



ところが会社の門の前には子供がたくさん集まっている。



三平は、すばやく石をひろいあげる。すると、善太が前に立ちはだかった。



二人はいそいで家にかけこんでいった。

スライドで読む 「風の中の子供」(抄)



三平は棒をひろうと、いきなり金太郎の頭をたたいた。

テープや紐を織る工場が村のはずれに立っていた。その会社が見える丘の上で、三平と金太郎が出会った。三平は一年生、金太郎は二年生である。

そのとき金太郎が三平を見てにやにや笑った。

「なんだい」

「お前んとこのお父さん、こんど会社やめさせられるんだぞう。そいでお巡りさんにつれていかれるんだぞう」

「ばかっ」

三平は棒をひろうと、いきなり金太郎の頭をたたいた。そこへ三平の兄、五年生の善太がやってきたのである。

「どうしたんだい、けんかはよせ」

「だつてさ、ぼく、なんにもしないのに三平ちゃんがぶったんだよ」「うそだあい」

と三平は言う。

しかし善太としては、いちおう三平をしかつておかねばならない。

「らんぼうしちや、だめだよ、三平ちゃん」

「だつて、金ちゃん悪いんだもの」

三平は、すばやく石をひろいあげる。すると、善太が前に立ちはだかった。石をなげようと身もだえする三平を、善太がだきとめた。そのすきに金太郎は、こそそとにげだしてしまった。

「金太郎ったらね、うちのお父さんが会社やめさせられるつて、それで、お巡りさんにひっぱつて行かれるつて。そんなこと、ないやね」

二人はいそいで家にかけこんでいった。

やがて夏休みがやってきた。三平はその日もいつものように会社の前のほうへやってきた。ところが会社の門の前には子供がたくさん集まっている。きょうは会社の会議の日で、三平のお父さんを重役からおとす、わるだくみがおこなわれる日だった。三平は、そんなことはなにも知らない。

しばらくすると、会社のなかから金太郎が、かけだしてきた。

「おおい、みんな、事務所でけんかやってんぞ、三平くんのお父さんが、みんなと顔を真赤にして議論してらあ」

あくる朝、柿の木に登っていた善太は、白い服の人が近づいてくるのに気がついた。

「あっ、お巡りさんだ！」

下にいた三平も、門の方へかけだした。

しかし、入ってきたお巡りさんは戸口調査に來ただけだった。お巡りさんが帰ると、善太と三平はむやみに愉快になって、なにかやりたくなった。

「兄ちゃん、オリンピックしないかい」

「うん」

「兄ちゃんが放送だよ、ぼくが泳ぐんだよ、いい？」

善太が始めた。

「あっ浮きました、葉室くん先頭、二番は田島くん、三平くんはずつとおくれてびりっこです！」

「だめっ。ぼくがびりっこなんかいやだい」

「がんばれ三平。がんばれ、がんばれ。あっ、たいへんなスパートになりました。勝ちました、勝ちました、三平勝ちました」

三平は、汗びっしょりになって、ござの上にのびたのである。



「いってまいります」
「三平ちゃん、わがままいうんじゃないよ」



鵜飼のおじさんは八の字のひげをはやしている。



二人はヒザをならべてすわった。



「二人でおとなしく留守をするんですよ」



「坊っちゃん、青山一郎って知ってる？」



「あなたが御主人ですね」

三平が三輪車にのっていると、前から洋服の人が自転車であつてきた。その人は三平にやさしくきいた。

「坊っちゃん、青山一郎って知ってる？」

「知ってるよっ」

「どこですか」

「ぼくんちだよ」

三平は得意になって、三輪車を家に走らせた。

「お母さん、お客さまだよっ」

ところが、お母さんがでてくると、その人はきゆうにまじめになった。

「御主人いらっしゃるでしょうね」

「はい、おります」

お母さんは顔色を変えてたち上っていった。お父さんがでてきた。「あなたが御主人ですね、なに大したこともないと思いますが、ちよつと本署まできてもらいたいのです」

お父さんは、そのまま外にでた。三平も善太も、不思議なこのありさまを門にたつて見送った。

夜はふけてくる。外はなんの音もしない。外は暗い、いや世界中が暗かった。それなのに、お父さんはどうとう帰らなかった。

「お母さん、お父さんを迎えに行つてきますからね。二人でおとなしく留守をするんですよ。誰がきても留守だからって門から中へ入れないんですよ」

お母さんがでていくと、善太と三平は門の戸をしめ、その上うん力を入れてひっぱつてみた。大丈夫とわかると、二人は座敷にいつて寝ころんでみた。するとにわかに家が安全になったように思えた。お母さんは、いつまでも帰つてこなかった。

鵜飼のおじさんは八の字のひげをはやしている。お母さんのお兄さんで、ここから二〇キロも山奥でお医者さんをしている。きのうお母さんは、そのおじさんと帰ってきたのだった。

「なあに、心配することはないさ。お父さんが帰らなきゃ、みんなでおじさんのところへきて暮らすさ。山に鳥もいりや、川に魚もいるぞ。山ん中でもたいくつすることはないよ」

すると、

「ごめんください」

玄関にたつてゐるのは、きのうきた執達史たちと、会社の佐山専務と、手下の赤沢銃三であつた。このときから家のそつどうがはじまつた。

「善太っ、三平もきなさい」

家の中からおじさんの声がした。柿の木からおりて、大急ぎで家の中に入ると、タンスにも戸だなにも白い小さな紙がななめにはりたてられていた。おじさんの前に、二人はヒザをならべてすわった。

「じつはな、とうとうこの家には、お金になるものは一つもなくなつたのだ。おじさんは警察にも行つたが、二日や三日でお父さんは帰つてこないのだ。分つたかね。そこで三平は今日からおじさんとここにきて、あちらの学校に行く。善太はお母さんとかで働きながら学校へ行くんだ。いいかい、今までとは違うんだからね」

いよいよおじさんのところへ行く時間がやつてきた。カバンを肩にかけた三平と、風呂敷づつみを手にもつたおじさんが、玄関にたつた。

「いってまいります」

「三平ちゃん、わがままいうんじゃないよ」
お母さんがいうと、三平はふりかえつてにつこりした。



子供たちが馬の上に乗った三平を見て声をあげた。

「あ、三平ちゃんだ！
たらいに乗って流されてんぞ！」



ある日、三平は幸介と二人で川に来ていた。



その時、三平は木に登っていたのだ。



少し歩くと、山をうしろに鶴飼のおじさんの大きなやぶきの家がある。



「ぼく、これからっ、ごやっかいになります」

ある日、三平は幸介と二人で川に来ていた。二人が土手から子供たちが泳ぐのを見ているときに、ふと二人の大人の声がした。

「新聞にも出ていたろう、青山一郎ってさ」

「うん、あれが青山の子供なのか」

三平はじっとしていられなくなつて、あたりを見渡した。すると、三平は面白そうなものを発見してその方へ歩いて行った。そこには水に半分浸かった、たらいがあった。三平はなにか冒険でもしなればならないような気持ちになつて、竹の棒を見つけてたらいを水の上に浮かべて乗った。力を込めて棒で河原を押すと、みるみるうちにたらいは、速度を増して流れ始めた。

「あ、三平ちゃんだ！ たらいに乗って流されてんぞ！」

泳いでいた子供たちが口々に叫びながら三平を追いかけた。ちようどそのとき、鶴飼のおじさんが、往診で馬に乗って川の土手の上を通りかかった。

「なんだ、なんだ。なにっ、三平が……」

おじさんは、馬に鞭をあて、土手道を競馬のように走らせた。

「さ、これをつかまえるんだよ」

三平に投げてやった綱を手繰り寄せながら、おじさんはほっとした。

「ぼく流されちゃったの。おじさん、心配してたの？」

「そうさ、もう、てっきり死んだかと思っていたよ」

三平を岸にあげると、おじさんは三平を馬に乗せて連れ帰った。

「わあーっ」

村の近くまで来ると、子供たちが馬の上に乗った三平を見て声をあげた。

バスに乗って二〇キロ。バスから下りて、川のせせらぎを聞きながら橋をわたった。

川はかなりの幅で流れている。そこから道は谷間にはいつて行く。少し歩くと、山をうしろに鶴飼のおじさんの大きなやぶきの家がある。

家に着くと、大きな声でおじさんが言った。

「帰ったよ、三平をあずかつてきた」

すると、すぐおばさんが出てきた。

「ぼく、これからっ、ごやっかいになります」

三平はすぐにこのうちの美代子と幸介と仲良しになった。縁側でキャラメルを食べていると、茶の間からおじさん、おばさんの話が耳に入った。

「大変なんですわね」

「私文書偽造という罪だそう。一年か二年は刑務所に行くだろう」

「じゃあ、三平ちゃん、その間ずつとあずかるんですか？」

「なにをいうんだ、おれは大学まで行かせるつもりだ」

「へえ、あんな子をねえ」

しばらくすると、三平がいなくなっていることにみんなが気づいた。その時、三平は木に登っていたのだ。

「お宅の蔵の松の木の上に坊ちゃんらしい姿が見えるんですが」

農家の人に指さされて、おじさんは驚いた。

「こらあつ、そこにいるのは三平じゃないか、ずいぶんさがしたぞ」と、木の下でどなった。



「いよいよ、お父さんの帰る日となった。」



「お父さんっ、お父さんっ、お父さんっ、お父さんばんざい」



「おもしろいな。お馬バカバカ、バカバカ」



「もう大丈夫、お父さんはすぐにでも帰られますよ」



「三平ちゃん、鵜飼のおじさんにもう一度お願いするから、おじさんのところへ行つてちょうだいね」



「こんなとき、三平がおれば、かくれんぼするんだけど」



嬉しさ、恥ずかしさのやり場はこうするしかなかった。

善太の家には三平がいない。お父さんも警察へ行ったまま帰ってこなかった。きょうは雨の中、お母さんも町に出ていて、善太は淋しく留守番をしていた。

「こんなとき、三平がおれば、かくれんぼするんだけど」

二、三日経って、三平がおばさんに連れられて家に帰ってきた。

「やい、三平」

「なんだいっ」

この声と共に二人は取っ組みあいをした。嬉しさ、恥ずかしさのやり場はこうするしかなかった。

「兄ちゃん、お父さんは？」

三平は思い出したように玄関に行くと、お父さんの下駄を探した。一番聞きたいお父さんのことは誰も話してくれなかった。善太も

何も言わず唇をかみしめた。眼にはいつばい涙をためていた。

お母さんは、おばさんが帰ったあとと善太に言った。

「鵜飼では三平ちゃんはあぶなくて預かりきれない、善太なら、これからでも連れて行くっていうんですよ。どうする？」

お母さんと善太は、町にある病院に住み込むことになっていた。

「お母さん、みんなどこへも行かないでさ、ここでお父さんの帰のを待っていたら……」

「それができればねえ」

お母さんは淋しく笑って言うのだった。お母さんは、善太を鵜飼のおじさんの家にやることにして、三平を連れて病院に行った。しかし、まだ小さい三平を見て、院長は受け入れを断った。

その帰り道、お母さんは三平に言った。

「三平ちゃん、鵜飼のおじさんにもう一度お願いするから、おじさんのところへ行つてちょうだいね」

「いや」

公園を出ると、そこには大川にかかった橋がある。お母さんはその橋の真ん中で立ち止った。

「三平ちゃん、お母さんが死んだらどうする？」

三平には、返事ができない。

三平はらんかんに登ってその上にまたがった。

「おもしろいな。お馬バカバカ、バカバカ」

「まあ、三平ちゃん」

お母さんは三平に抱きついて、涙をすすり上げた。どんなにしても、この子を育てあげようと決心した。

家に帰ると、善太が淋しそうに迎えた。その時である。お母さんが、飯台の上に置かれている、一冊の古いノートを見つけた。見ると、お父さんの古い日記で、中から一枚の書付が落ちた。それを見たお母さんは、手が震え、涙がほろほろこぼれてきた。

善太と三平は心配そうにお母さんを見つめている。

「とってもよいことなの。もう大丈夫、お父さんはすぐにでも帰られますよ」

この書付こそ、お父さんが偽造したと言われたものだった。お母さんは、それを握りしめて暗闇の中に駆け出して行った。

いよいよ、お父さんの帰る日となった。

善太と三平は、「ばんざい」をいうことにした。しばらくすると、一台の自動車がやってきて門の前で止まり、中からヒゲにまみれたお父さんが出てきた。

二人は一瞬、悲しくなって声がつまって出ない。

三平は小さな声で「お父さん」と言う。そして二人は声を合せて言った。

「お父さんっ、お父さんっ、お父さんっ、お父さんばんざい」

(終)

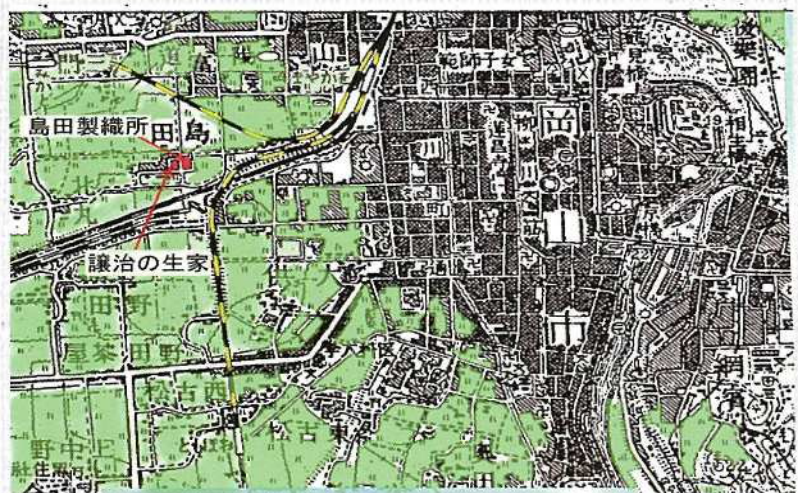


天満(現・岡山市北区御津紙工)は譲治の姉政野の嫁ぎ先で、譲治もしばしば訪れた馴染みの地です。小説では、三平が身を寄せる伯父の住む地として描かれます。

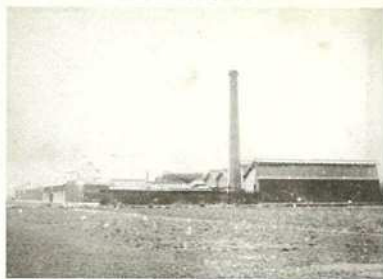
島田(現・岡山市北区島田本町)は譲治が生まれ育った村で、譲治が勤務していた島田製織所がありました。三平一家の暮らす地の舞台として描かれます。



坪田譲治 島田の生家にて
生家の蔵とクスノキと
(最後の帰郷 昭和五十三年十月二十七日)



五万分一地形図(岡山南部)
明治三十年測図大正十四年修正測図
内務省地理調査所(昭和二十一年十二月三十日発行)



譲治の父が創業したランプ芯工場



ランプ芯

(岡山市立石井小学校蔵)

テープや紐を織る工場が村のはずれに立っていた。資本金八万円、職工四十人。それでも組織は株式会社で、明治の時代に建てられ、赤煉瓦の煙突を高くそびやかしていた。
「風の中の子供」より

島田製織所(ランプ芯工場)大正11年頃 一川田照治撮影





譲治の姉政野の嫁ぎ先 天満の伊丹家（鶴飼家のモデル）

二町も歩くと、山を後に鶴飼のおじさんの家がある。大きな茅葺の母屋、両脇に離れと診療所の瓦屋根、離れの後は白壁の土蔵、土蔵の戸口に太い高い松の木、……。

「風の子供」より

母屋の右が診療所、その右が病棟だったんじや。



鶴飼のおじさん



伊丹家図（昭和10年頃） 宮嶋泰明作製

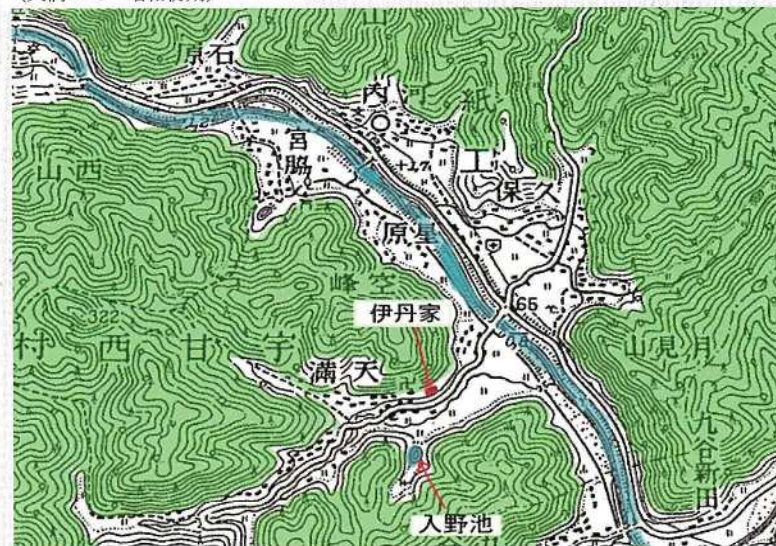


バスに乗って五里。バスから下りて、瀬の音の高い橋を渡った。川はかなりの幅で流れている。そこから道は谷間に向ってはいって行く。

「風の子供」より



島田製織所社員時代の譲治（天満にて 昭和初期）



五万分一地形図（岡山北部）
明治三十年測図大正十四年第二回修正測図
大日本帝国陸地測量部（昭和四年四月三十日発行）

そのうち、山の池の側に出たのである。谷間の一方に高い堤があって三方は山の斜面で、高い木が茂っていた。水にはその木々が映り、蒼々と深く、物凄さに三平もいばることを忘れた。

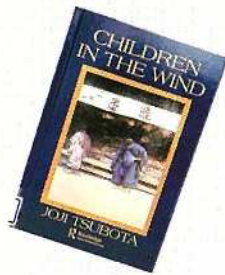
「どう？ 三平ちゃん、あんたん処の方にはこんな池ないでしやう？」

「風の子供」より



いんの
現在も蒼々とした入野池

譲治は釣りをすることが好きで、入野池にもたびたび釣りに出かけていました。



世界も注目!

ハーバード大学名誉教授ロバート・エップ氏が
訳した『CHILDREN IN THE WIND』

Robert Epp 『CHILDREN IN THE WIND』
(Routledge 1991年)

「風の中の子供」の三平の登場シーンを
ロバート・エップ氏はこんな風に訳しています!

夏のある日、その会社の近くの石橋の上で、三平と金太郎が出会った。三平は一年生、金太郎は二年生。ところで、其時金太郎がニヤニヤ笑ったのである。三平を馬鹿にした笑方である。

「なんだい。」

三平がとがめた。然し金太郎はニヤニヤをやめない。

「なんだい。」

三平は喧嘩腰になる。と、金太郎が顔を突き出して言う。

「お前んとこのお父さん、今度会社をやめさされるんだぞう。」

「ウソだあい。」

三平が言う。

「ウソなもんかい。見てて見ろ。やめさされて、警察につれて行かれるんだ。お巡りさんにくくられて、御免なさい御免なさい、言い言い引張って行かれるんだ。」

「バカッ。」

もう承知出来なかった。

英訳

One summery day Sampei ran into Kintaro on the stone bridge by the factory. Sampei was in first grade, Kintaro in second. Kintaro had a chip on his shoulder and made fun of Sampei.

'What's the matter with you?' Sampei challenged. Kintaro continued to taunt him.

'What's the matter?' Sampei asked again, ready to fight. This time Kintaro answered haughtily, 'Your dad's gonna be fired.'

'No he's not', Sampei said.

'Oh yes, he is. You'll see. They'll fire him and the cops'll come and take him away. They'll tie him up and haul him off, and he'll say "I'm sorry, forgive me, I won't do it again!"'

'Aw shut up.'

Sampei didn't want to hear any more.

訳者ロバート・エップ氏による「あとがき」より

——坪田は、青山家の少年たちを温かく、それでいて現実的に描写しています。

私たちは、大人の世界の騒動が彼らの人生に影響を及ぼすことに共感を覚えます。

少年たちがなぜ現実の領域と想像の領域との間を行き来するのか、その理由もわかります。

そのため、坪田が説得力のある児童の世界を描いた最初の日本人作家だとまでいう人々がいるのはなぜなのか、容易に理解できます。——

——彼は、自身の3人の息子を多くの作品のモデルに使いました。そこに描き出されている子どもたちの姿は、現在日本文学における子どもの最も効果的な描写の1つと認められています。——

知ってる?

「風の中の子供」に描かれた善太と三平の遊び

〈オリンピック遊び〉

「兄ちゃん、オリンピックしないかい」

この三平の呼びかけで、オリンピック遊びが始まりました。善太が実況中継をするアナウンサーとなり、三平が水泳選手となって、二人でオリンピックのまねをしました。

三平は柿の木の下にゴザを敷いて、水の中を泳ぐように、ゴザのうえで手足をバタバタさせます。そして、「ガンバレ三平ッ、ガンバレ、ガンバレ」という善太の熱いアナウンスで、三平はついに一番になりました。

「風の中の子供」は昭和11年9月から11月まで『東京朝日新聞』夕刊に掲載されました。その直前に、8月1日から16日まで、ベルリンオリンピックが開催されており、水泳の日本人選手はメダルを量産しました。作品では、「前畑」「葉室」など実在の選手の名前も用いられており、また実況中継のアナウンスの口調も、そのまま善太がまねています。



(スライドフィルムより)



兄ちゃん!
オリンピック、
もう一回やろうよ!

〈たらいのお船〉

親戚の鵜飼家に一人預けられた三平は、帰りたいという思いで、その家の近くの川で、たらいに乗って遊びました。

「大船、小船、たらいのお船」。こう言って助けも呼ばず、三平はおもしろそうに流れ下ったのです。

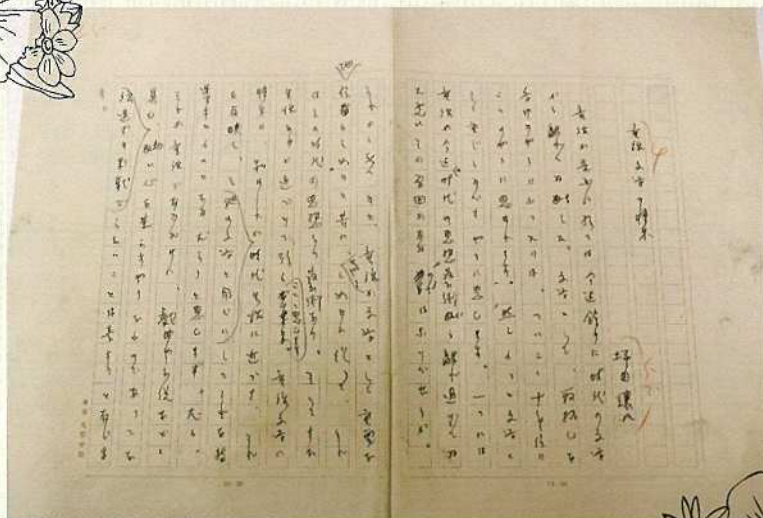
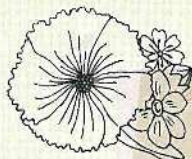
この出来事によって三平は鵜飼のおじさんだけでなく、村の人々までもこまらせてしまいます。ようやく三平は鵜飼のおじさんによって無事救出され、子どもたちに取り巻かれます。

三平が遊んだこの川は、譲治の姉政野が嫁いだ伊丹家の近くにある、宇甘川が舞台であると考えられています(13、15頁を見てね)。

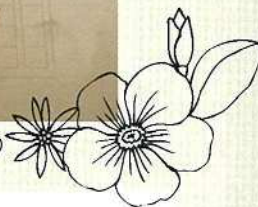
川をたどっていくと、天満から島田に着きますね。



(スライドフィルムより)



直筆原稿「童話文学の将来」初出未詳（坪田譲治コレクション蔵）



童話文学の将来

童話が吾国に於ては今迄餘りに時代の文学から離れてゐました。文学として、取扱ひを受けるやうになつたのは、ついこゝ十年位のことのやうに思はれます。然しもつと文学として重じたるべきやうに思ひます。一つには童話が今迄、時代の思想藝術から離れ過ぎてゐた処にその原因があるのではないでせうか。それから考へると、童話が文学として重要な地位をしめると共に、やゝしめるに従つて、それはその時代の思想なり藝術なり、そしてまた生活なりに近づいて行くこと、思ひます。童話文学の将来は、私はそれが他の文学と同じに時代生活に近づき、それを反映し、そしてそれを指導するものとなるだらうと思ひます。尤も、それが童話であるだけに、戯曲や小説など、異ひ、強過ぎる刺戟で幼い心を荒らすやうなものであつてならないことは素よりと存じます。

坪田譲治



譲治の童話に対する熱い想いが伝わってくるね！

ノートルダム清心女子大学附属図書館 「坪田譲治コレクション」を……の・ぞ・き・み



現在、「風の中の子供」をテーマにした展示をしています。



坪田譲治 生家 模型（100分の1）（山根知子研究室蔵）



島田にあった生家だよ！



譲治のおかやま

山根 知子 作詩
串田 果奈 作曲

♩=106 *mp*

1. たんぼ の なは 一 かけ のに ちい さ な む れ ら て き ら め ひ

5 *mp*
が わ に お が わ が い く す じ も な が れ る み な よ

9
そ い には も が 一 ゆ れ て ど ん こ つ も 一 つ ろ い で い る ひ な

13
く 一 れ か し ま で あ そ は だ し ま だ ら か つ ば や き つ ね が こ で る ぐ し ま え と

17 *mp* *mf*
か え た ろ う ほん と に と う げ ん 一 き ょ う と は

21
こ こ だ っ た ん だ よ し ぜ ん の お お き な い の ち に

25 1.
つ な が 一 っ て し あ わ せ を は 一 ぐ く む

29 *mp* 12. *f*
じ ょ う じ の お か や ま 2. も も し あ わ せ を は

33 *rit.*
一 ぐ く む じ ょ う じ の お か や ま

譲治のおかやま

一 島田 小学校時代

田んぼのなかの小さな村

きらめく小川が幾筋も流れる

水底には藻がゆれ

ドンコツもくつろいでいる

日の暮れかかるまで 遊んだ島田

河童や狐が出てくる前に帰ろう

本当に桃源郷とはここだったんだよ

自然の大きないのちにつながって

しあわせを育む 譲治のおかやま

二 金川 中学校時代

桃の畑にかこまれて

旭川に沿って列車は走る

清い水が満ち満ちて

カイツブリも安らいでいる

金川から島田へ 川はつながる

未来の夢や志 友と語ろう

本当に桃源郷とはここだったんだよ

自然の大きないのちにつながって

しあわせを育む 譲治のおかやま



A「夜」

「だれ？ にいちゃん？ おとうさん？」

いつものように男の子四人で討論会を開いた夜のこと。今夜のお題は普段とは一味違った「夜」について、人間はなぜ夜が怖いのかという問題。それは人間が進化の過程でいろいろな動物になった時、敵に食われたり襲われたりしたのが夜だったからだということです。ふと四人の討論が止まったその時、電燈が消えて…？

涼しくなっちゃうようなちょっぴりホラーなお話です。

C「探検紙芝居」

「お父さん、いい考えがあるよ。そんなときは大砲を打てばいいじゃないか。」

善太と三平は、お父さんの紙芝居が大好きです。それもただの紙芝居ではありません。「あ、お父さん、待って、待って。僕に大鷲を一羽持たして」と善太。「ウン、僕には網を持たして。魔法の網」と三平。子供たちのユニークなアイデアによって誰も想像しない展開を見せる、新しい「紙芝居」です。

E「城山探検」

「ぼくは左近将監の命令により、これからあの向うの城を攻め落とすんだ。」

万成山へ探検にくりだした正太と善太。その頂上には昔、城があったといいます。刀や槍、よろいや甲がうまっているかもしれないと、二人はワクワクしながら登っていきます。いつの間にかずいぶんと上の方まで来てしまったようです。足がすくむような深い谷、不気味な鳥の鳴き声にだんだんと怖さがまさってきました。さて二人の探検の行方は？

B「ビワの実」

「もうこれでいい。明日ぐらい芽を出すかもしれないぞ。」

ある朝、木こりの金十は鳥の卵のように金色に光る、一つの美しい木の実を見つけます。金十は初めて見るビワの実をひとりでじっくり味わおうと、他の動物たちに取りられないための作戦を考えます。そしてついに口にしたビワの実は驚くほどの美味しさです！ 金十は食べたあとの種を土に埋めてみます。見る間に大きくなり実ったビワの実は超特大!?

これは金十の夢？ それとも現実？

D「三平の夏」

「金や銀は光っているものなんだろ。」

夏休みのある日のことです。鵜飼のおじさんの家で、三平、美代子、幸介は、おばさんから聞いた山姥の話でごっこ遊びを始めます。それはどんどん盛り上がり、もとのお話から離れていってしまいます。三平と幸介の強引さに困ってしまう美代子。大人になってから読むと、自分たちの幼少期を思い出してしまうような微笑ましいお話です。

F「バケツの中の鯨」

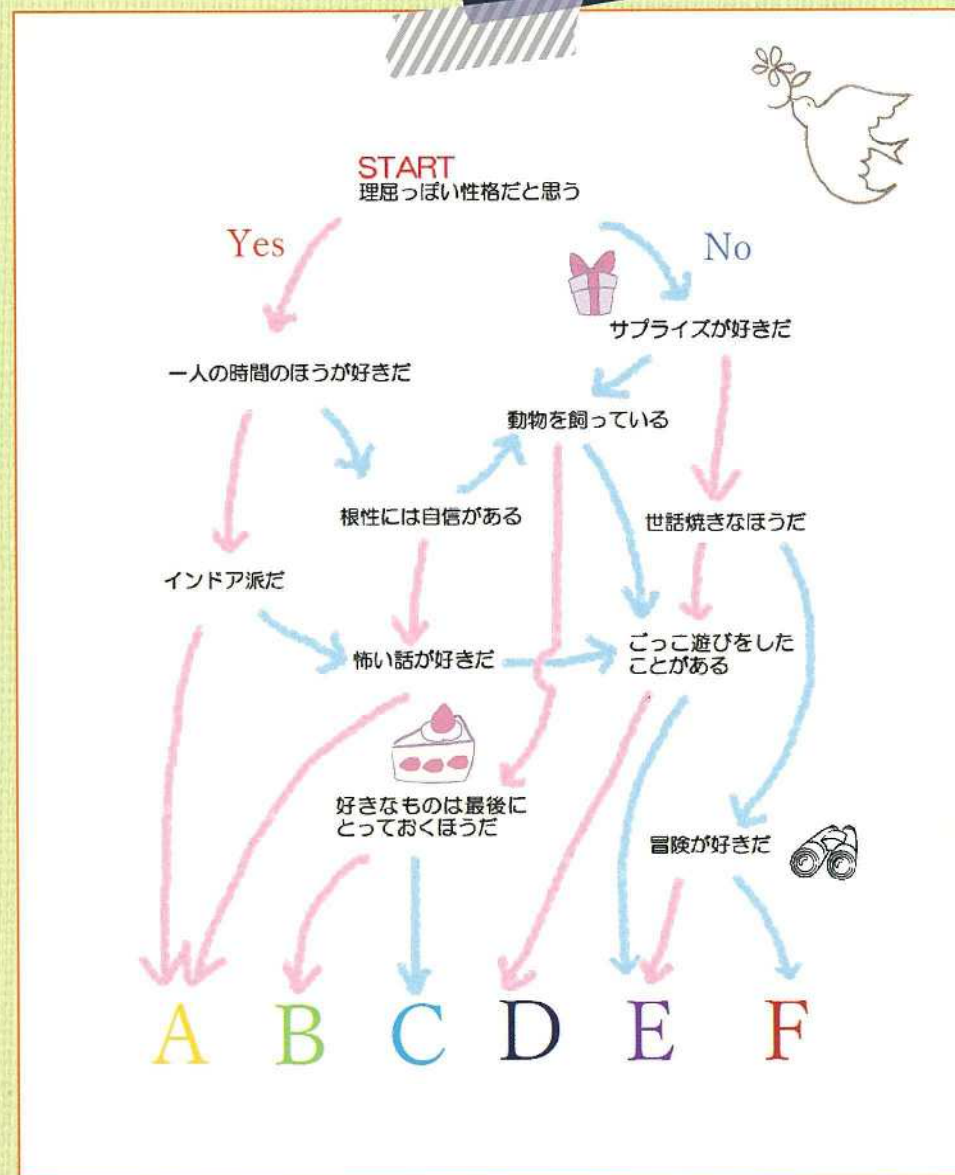
「大きかったら、引っぱってくればいいや。」

良ちゃんは、やんちゃな6歳の男の子です。おじさんに木登りを自慢してみたり、大きくなったらお医者さんになるんだと言ってみたり、誰もこんなふうにならなくて大人びてみたくなる時期があったのではないのでしょうか。さて、このあと良ちゃんが魚釣りや鯨をとりに行くと言い出します。果たして良ちゃんはかっこいいところを見せることができるのでしょうか。

診断！

あなたにぴったりの一冊を

結果は次のページです



最後まで読んでくださり、ありがとうございました。

★お世話になった方々

坪田 理基男さん
坪田 陽子さん
伊丹 仁朗さん
本郷 寛武さん
宮嶋 泰明さん
福田 忍さん
足立 萬壽子先生（元ノートルダム清心女子大学教授）
木山 博雅先生（ノートルダム清心女子大学客員教授）
熊澤 住子先生（ノートルダム清心女子大学教授）
岡山市立石井小学校
「文学と岡山」製作委員会

※「風の中の子供」のテキストは『坪田譲治全集』第三巻（新潮社 昭52・9）によった。



★「ツボジョーワールド探検隊」編集部

ノートルダム清心女子大学 日本語日本文学科
楠戸友梨
岡本有稀
黒住怜未
菱川千尋
吉田万莉華
監修・山根知子（ノートルダム清心女子大学教授）



後楽園にて（写真家 小石清撮影）

岡山市「大学生まちづくりチャレンジ事業」
参加プロジェクト
発行日 二〇一八年八月二〇日
発行者 ノートルダム清心女子大学
日本語日本文学科
山根知子

